

街を行く

第62回 マニラ（後編） MAnira

貧しいこそその活気あり？

前号では新しい都市としてのマニラを紹介しましたが、それはほんの一部です。じつは街の大半は貧しい地帯です。今回は「スラム」と「交通渋滞」というマニラ2大名物を取り上げ、この街のもうひとつの顔をみていきます。

「スラム」は貧困者の密集地域です。日本では当然である生活環境がそこにはありません。そのかわり日本にない若者のハングリー精神やバイタリティで溢れかえっています。この活気は貧しいからこそでしょう。またスラム地域ではボクシングが盛んです。理由はフィリピンの国民的英雄マニー・パッキャオ選手の影響でしょうが、ボクシングがスラム脱出手段に選びやすいのもあります。ここにいる限り生活は厳しい、かといって抜け出すのはむずかしいというのがスラム。抜け出すには人並み外れた知恵と体力、技術が必要です。教育や福祉が行き届かないなかで知恵をつけるのは困難ですが、スポーツは体力と技術を身につけやすい。なかでも一番手っ取り早いのがボクシングというわけです。それに加えパッキャオ選手の年俵が世界中のスポーツ選手のなかで2番目だとなれば、ハングリーなスラムの若者に人気がないはずがありません。ちなみにパッキャオ選手は大統領より有名なのだそうで、彼を宣伝に使った企業広告が街中に溢れています。

「交通渋滞」は今やマニラに限らずアジア新興国のすべてで名物と言えるかも知れません。渋滞の原因は経済発展にインフラ整備が追いつかないこと。旧マニラから新しい街には鉄道が通って



いますが、多くの住民の足にはなっていません。活躍しているのはバスとジムニーとよばれる乗合タクシーもどきです。郊外から街中へ通常30分の道のりを2時間もかけているのが日常です。バスを待つ人の長い行列は名物です。観光客が眺めるには面白いのですが、当の住人にとってはたまったものではないでしょう。

人口増、経済規模拡大にあわせ国がドンドン新しい都市をつくるのは解なのですが、どうしてインフラ整備をおざなりにするのでしょうか。筆者は、おそらく街づくり事業がフィリピン国家ではなく、有力財閥に委ねられているからだと思います。国家が街づくりに手が回らないのが実情ですし、財閥がつくった街から税金を徴収したほうが手っ取り早いですから。これはアジア新興国だけではなく世界中でみられることです。ただ、都市計画はインフラ計画から入るヨーロッパと比べ、カオスなアジアは大きく違うかもしれません。

スラムと交通渋滞から考えさせられたのは、日本の少子高齢化問題です。街



マニラの交通渋滞と古い町並み

づくりは思い立てば出来ることですが、将来それらを担い使う人間がいてはじめてできる話です。人口減少の問題は計画的にはいきません。若者や子供が街に溢れていないと何も生まれないのです。そういう意味で、この都市の将来は計画的でなくとも東京よりも明るいでしょう。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。